国際日本学研究科

修士学位請求論文　論文要旨

〔論文題名〕

『週刊少年ジャンプ』のスポーツマンガにおける女性キャラクターの表象分析

国際日本学専攻　博士前期課程	
ポップカルチャー　　研究領域	
学生番号	4911191006
氏　　名	周　晨暁
指導教員	藤本由香里

本稿の目的は、創刊から50年以上の歴史を持つ『週刊少年ジャンプ』のスポーツ漫画を分析対象とし、各作品の書かれた時代背景を意識しながら、女性キャラクターの描かれ方はどのように変化してきたのかということを明らかにすることにある。

先行研究を検討したところ、スポーツマンガの女性キャラクターの研究においては、主に「女子マネージャー」と「女性監督・コーチ」を中心に論じられてきたことがわかる。一方で、スポーツマンガの歴史の研究においても、スポーツマンガの「女子マネージャー」像の変遷研究においても、1980年代以後、スポーツマンガにおける恋愛要素は拡大していった、と指摘されていた。このことから、女性の「役割」が「恋愛」とどうかかわっていたのかの変遷も、本研究において重要な分析対象となった。

また、『週刊少年ジャンプ』の人気スポーツマンガは、男性キャラクターをカップリングして遊ぶ二次創作の対象になってきており、腐女子たちの熱い人気を博してきた。一般に、男性キャラクターの恋愛対象となる女性キャラクターの存在感が強いと、二次創作はやりにくいと言われる。しかし2000年以後、一部の人気作品においては、女子マネージャーや監督・コーチ等が重要なキャラクターとして存在するものの、その位置付けは、メインキャラクターの恋愛対象という位置から徐々に変わってきているように思える。

以上のことを踏まえ、本研究では、次の仮説を立てた。

昔の作品において女性キャラクターのポジションは、主人公との関係を重視し、主に恋愛関係として設定されてきたが、2000年以後は、チームの中での仲間としての役割を果たすようになってきたのではないか。だからこそ腐女子にとっても、あまり邪魔だと感じられなくなったのではないか。

仮説を明らかにするために、本研究では、『週刊少年ジャンプ』に連載された全スポーツマンガを洗い出し、『週刊少年ジャンプ』のスポーツマンガ全体と、その中に登場する女性キャラクターの位置づけに関し、詳しい調査を行った。また補足として、同人二次創作作品やキャラクターグッズ市場の調査を行った。

本研究の調査により、『週刊少年ジャンプ』のスポーツマンガでは、創刊号からはじまって、「2020年33・34合併号」までの全冊において、一本以上のスポーツマンガ作品が掲載されていた。『週刊少年ジャンプ』において、スポーツを題材とするマンガは一つの定番ジャンルとして定着していた。

また、女性が登場する作品の統計結果を見ると、『週刊少年ジャンプ』のスポーツマンガにおいては、女性の登場が徐々に増え、定番になってきている。

本研究では、女性キャラクターの役割を、「マネージャー」・「監督・コーチ」・「選手」・「記者」・「教師」といった五つの公的な役割に分類し、それ以外の、「選手の親衛隊」「主人公の家族」「幼馴染」……といった私的な役割をまとって登場する女性は「その他」に分類した。

調査結果を見ると、「その他」に該当する人数が最も多かったが、1995 年以降、その割合は減り、とくに 2000 年以降、大幅に減少していた。つまり 2000 年代以降は、私的な役割の女性が減り、何らかの公的な役割を持つ女性がほとんどを占めることが判明した。これは本研究における最も大きな発見である。

女子マネージャーを務める女性は、主人公の恋愛対象になる人数が最も多かった。ところが 90 年代に入ると、有能な女子マネージャーの人数が増加すると同時に、彼女たちの仕事描写のシーンも多くなっていく傾向があった。一方、主人公の恋愛対象としての女子マネージャーの割合は大幅に減少してきた。このことから、近年、女子マネージャーの存在は「恋愛対象」ではなく、「チームの一員」であることが定着してきたと考えられる。つまり、本研究の仮説は実際の数字で裏付けられたと言えるだろう。

特定の役割がある女性のうち、「選手」の人数が最も多かったが、かつては女性選手もまた、マネージャーと並んで主人公の恋愛対象と位置付られていたことがわかった。だが、2000 年代後半から、恋愛対象としての女性選手の姿は完全に消えていった。一方、団体競技の中でも女性を登場させる作品が増加しており、2010 年以降は、女性選手が活躍するジャンルも多様化していく傾向がある。すなわち、2000 年以後のスポーツマンガにおいては、女子選手の存在がほぼ完全に、「恋愛対象」から「試合参加者」の形に変わっていったことがわかった。

女性監督・コーチ、女性記者と女性教師においては、調査の結果、主人公の恋愛対象になることはなかったが、いずれの役割に関しても発見があった。

チームの指導役を果たす女性の監督・コーチを見ると、1970 年まで、お色気要員としての描写が多かったが、80 年代以後、女性監督・コーチの仕事シーンの描写が増えていることがわかった。

記者と教師の役割においては、全体的な登場人数はあまり多くないが、いずれも登場するのはほとんど女性である。とくに、記者については女性が圧倒的に多く、しかも各時代にコンスタントに登場していた。男性記者・カメラマンはその相棒として登場し、単独で登場することはなかった。

また、「恋愛」の調査結果においては、全体的に見れば、恋愛と無関係な女性キャラクターの割合が増加している傾向があった。先行研究の指摘とは違って、『週刊少年ジャンプ』においては、創刊号から主人公となんらかの恋愛関係を持つ女性が存在していた。1980 年～1989 年の間でそれらの人数が最も多かったが、1990 年代以後は減少していた。とくに 2005 年以後、「恋愛」要素を含めた作品は人気を集めることが難しくなるという傾向があり、恋愛要素の重要性が減っていることがわかった。

次に行った、補足調査の結果により、2010 年以後、アニメ化された大人気スポーツマンガ『黒子のバスケ』『ハイキュー!!』『火ノ丸相撲』において、腐女子人気が高い『黒子のバスケ』『ハイキュー!!』と、2005 年以後、唯一の「恋人」関係を確立した長期連載作品『火

ノ丸相撲』とでは、二次創作においては人気に 2 ケタの大きな開きがあることがわかった。

一方、圧倒的に腐女性の人気を博した『テニスの王子様』においては、作家・許斐剛は、ファンの反応に敏感であり、創作も商品市場から大きな影響を受けていることがわかった。

二次創作の人気や、ボイス情報社による『ライセンスキャラクター消費者調査』の男女別の作品知名度の変化を示すデータをみても、2000 年以後の人気作品においては、少年マンガでありながら、いくつかの作品については女性の知名度の方が高かった時期があることがわかった。とくに腐女子の関心が高まっている作品においては、女性の恋愛対象としての存在感が薄くなっていたこともデータからわかった。だが、『火ノ丸相撲』のような男性人気の高い作品においては、主人公の恋愛対象としてのヒロイン像が維持されていることがわかった。

ここまでの内容を踏まえ、最初に掲げた本研究の仮説は正しかったと考えられる。

本研究を通じて、2000 年まではたしかに、重要な女性キャラクターのポジションは主人公の恋愛対象であることが多かったが、80 年代をピークに、恋愛要素は減っていく傾向があった。女性マネージャーにおいても、恋愛対象としての割合は大幅に減少していた。女性選手が恋愛の対象になることも、2005 年以後、まったくなくなった。そして 2000 年以後、私的な関係の女性が激減して、女性キャラクターのほとんどが具体的な役割を担うようになったという発見は、先述した通りである。1990 年後半から、有能な女子マネージャーや女性コーチ・監督の人数が増加すると同時に、彼女たちの仕事描写のシーンも多くなっていく傾向があった。腐女子にとっては、チーム男子の傍らにいる恋愛対象としての女性の存在は邪魔なものであるが、2000 年以後、スポーツマンガにおいて「恋愛要素」が減少し、女性キャラクターの「チームの仲間」としての立場が強調されてきたことは、腐女子たちが安心して作品のファンであり続けられることを保証したのではないだろうか。